

横幹連合創立20周年を迎えて

横断型基幹科学技術研究団体連合会長 安岡 善文*



横幹連合は本年（2023年）創立20周年を迎えました。2003年4月7日に30学会が参加して東京大学山上会館において開催された設立総会が起点となります。2005年11月には長野において第一回横幹コンファレンスを開催し、「コトづくり長野宣言」を発出しました。10周年を迎えた2013年は東日本大震災の直後だったこともあり、創立10周年の記念式典は開催せず、“横幹連合10周年の歩み”を「横幹」特集号として発刊しています。

20周年においては、コロナ禍の概ねの終息を受けて、本年6月13日に東京大学山上会館において創立20周年記念式典を開催することができました。オンライン参加の併用によるハイブリッド開催でしたが100名近い参加を得ています。この20年の会員学会の皆様、また横幹連合の活動をご支援いただいた皆様に感謝の意を表します。加えまして運営を担っていただいた理事、監事を初めとする役員の皆様、事務局の皆様にも篤く御礼申し上げます。この10年の横幹連合の活動につきましては、“横幹連合の歩み（2013～2022）”として「横幹」20周年特集号を発刊する予定で準備を進めているところです。

今年の20周年記念式典におきましては、特別講演に小谷元子先生（東北大学教授、理事・副学長）をお招きし「科学と社会—Interdisciplinaryを超えてTransdisciplinaryへ—」と題してお話を伺いました。学の様々な分野が連携して課題の解決を目指すInterdisciplinaryな活動はこれまでも行われてきましたが、これでは真に社会の抱える課題を解決することはできない、その解決に向けては“学界を超えて”，社会と直接繋がり社会の人々と連携するTransdisciplinaryな考え方が必要であるというお話

でした。小谷先生が研究総括を務められる、JST-JICAの共同事業であるSATREPSプログラムでの具体的な実践例の紹介もいただきました。

Transdisciplinaryは横幹連合の英語の名称として発足当初から使われており（Transdisciplinary Federation of Science and Technology; TraFST）、横幹連合の核となる考え方でもありました。その学としての方法論を提示し、それを実践してゆくことは横幹連合の大きな課題でもあります。20周年記念式典にご列席いただきましたご来賓の方々（総合科学技術イノベーション会議 松尾泰樹様、日本学術会議 吉村 忍様、横断型基幹科学技術推進協議会 桑原 洋様）、またパネル討論での歴代会長・副会長の方々（吉川弘之様、木村英紀様、出口光一郎様、鈴木久敏様、北川源四郎様、遠藤 薫様）から示唆に富んだ多くのお話をいただきましたが、**Transdisciplinary**という考え方を理念から実践に移すことが重要とのご指摘を数多くいただきました。これまでの20年間の横幹活動を振り返って、実践活動が足りないという辛口のご意見も含めて、今後に向けての励ましのお言葉でもあったと思います。我々としてもその活動を加速しなければなりません。

横幹連合は、一昨年それまでの横幹図を新たにし、新横幹図を作成しました（**Fig. 1**）。この改訂の趣旨は、それまでの学会を横断的につなぐという視点から一步踏み出して、さらに学会を繋いだ成果である横幹知を学界という枠を超えて社会に繋ぎ、社会が抱える課題を解決するという意思を表示することにあります。この図にありますように、左側の縦型の学を横に繋ぐという学の横断化に加え、右側に具体的な社会への接続を加えたわけです。ここにはSDGsやSociety 5.0といった社会的なテーマを明記して、横幹知の出口をはっき

*東京大学名誉教授

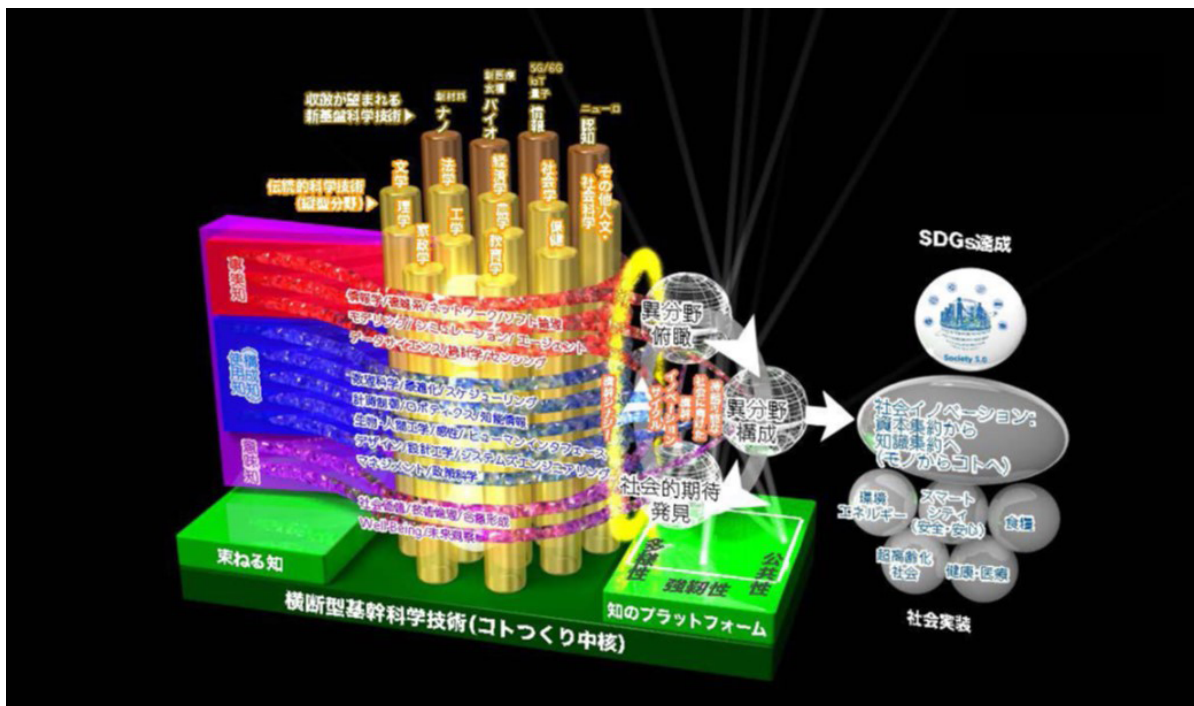


Fig. 1: Updated TraFST Conceptual Framework.

りと意識するよういたしました。横幹知の社会実装は、20年前に発足した時から意識されていたもので、「ことづくり長野宣言」の中でも謳われております。それを現在の時代要請を受けて実践に移行する覚悟を示したものであることができます。

今年の暑さは世界的に異常でした。今年の暑さを受けて上梓しました拙文（「横幹」Vol.16（2）巻頭言「暑い夏—異常を常態の始まりとしないために—」）にありますように、異常と思われる世界的な気候変動を常態としないためには、関係する全ての学問分野が連携して社会の人々とともに社会を変革していく、しかもそれをできるだけ早く始めなければなりません。Transdisciplinaryは将来の課題ではなく、いま始めなければならない実践活動なのです。

Transdisciplinaryを横幹連合としてどう進めるか、「横幹」本号（Vol.17（2））においても、Transdisciplinary研究の実践を進めてきた科学技術支援プログラムであるフューチャー・アース（Future Earth）とSATREPSについて、JSTの担当者の方々から寄稿を頂きました。三村恭子氏による“RISTEXにおけるトランスディシプリナリー研究支援～フューチャー・アース構想の推進事業および社会技術研究

開発について～”と、加藤裕二、武富香織氏による“SATREPSのすすめ”です。これらの実践研究プログラムを参考として、横幹連合もTransdisciplinaryの実践における学の深化を図ってゆく必要があります。横幹連合ではさらに、調査研究会“TD（Transdisciplinary）概念の明確化とその研究評価システム”を近く発足させるべく準備を進めています。TDという考えを具体的に分かりやすく提示するとともに、そのための研究評価の在り方を提案することを目的としました。会員の皆様の積極的な参加をお願いいたします。

横幹連合では20周年の記念事業として、創立20周年記念式典の開催、および特集号“横幹連合の歩み（2013～2022）”の発刊を二大柱として計画し、進めてきましたが、20周年を機に新たに事業を進めることも計画しています。前述のTransdisciplinaryに関する調査研究会の発足もその一環と考えています。その他にも、横幹ロードマップの改訂（2009年に第一回目のロードマップを作成）、またモノづくり・コトづくりの考え方の再整理、が計画されています。

前述のように、横幹連合では第一回横幹コンファレンス（2005年）において「ことづくり長野宣言」

を発出しました。これは今後の世界をリードしてゆくためには、それまで日本が得意としてきた“モノづくり”に加えて、“コトづくり”の推進が重要であり、その核となる学の一つがシステム科学技術である、ということであったと思います。それから20年が経ち、昨今のChatGPTを初めとする大規模言語処理システムを核としたAI技術の展開を見ると、コトづくりの重要性を指摘した点は正しかったものの、その実践では大きく後れを取ってしまったという感は否めません。学の立場からこの遅れを取り戻し、モノづくり・コトづくりの考え方を再整

理して、その実践に向けたアイデアを出すことは横幹連合の一つの責務といえるでしょう。既に昨年度の会長懇談会から検討を開始しています。紙面の都合で、ロードマップの再検討、またモノづくり・コトづくり概念の明確化については別の機会に譲りたいと思いますが、これらが次の10年に向けた横幹連合活動の中核の一つとなることは間違いありません。

これまで横幹連合の活動をご支援いただいた皆様に深甚なる感謝を申し上げますとともに、これからの横幹活動へのご支援をお願いいたします。